

# 令和7年度 追跡評価書

研究機関 : アビームコンサルティング(株)、産業医科大学、  
東北大学病院、防災科学技術研究所

研究開発課題 : 「IoT/BD/AI 情報通信プラットフォーム」社会実装推進事業  
課題 I 最先端の自然言語処理技術を活用した  
高度自然言語処理プラットフォームの研究開発

研究開発期間 : 平成29年度～ 令和元年度

代表研究責任者 : 織田 美穂

## ■ 総合評価

### (総論)

本プロジェクトは約十年前に計画したものだが、自然言語処理を社会のプラットフォームにするという取り組みは、フレームワークとして先進的でとても素晴らしいと思う。また、防災に対する ICT 利活用という観点で、研究開発課題の重要性を示せた。しかし、LLM の急速な発展によるビジネス環境の変化の中、令和4年に開発システムの商用サービスが終了し、十分な商用普及には結び付いておらず、その際には、システムの得意・不得意な部分を整理し、得意な部分(強み)を伸ばす動きや、適切な利用者を想定したアプローチを試みるなど、検討の余地があっ

た。

(被評価者へのコメント)

- LLM の急速な発展もあって商用化に結びつかなかった点はやむを得ない部分もあるが、強みを持っている部分をもう少し上手に売り込むなどして欲しかった。
- 防災に対するICT利活用という観点で、その重要性を示せたと思われる。
- ICT技術の転換という観点から、継続性が難しかったかもしれないが、SNSを含めたデータ収集とその活用と観点からは、今後も継続性を考えるべきものであり、防災という特質上、一度起きた場合の人的、経済的損失を考慮すれば、そもそも経済的なサービスとしての要求はあまり求めずに、データの利活用とその持続性という観点で評価したほうがよい事案とも感じる。
- 当初のねらいの成果は出ていないが、時代的にタイミングが良くなかった。
- 防災情報に限らず、より幅広いターゲット設定で進められたら良かった。
- 防災 DX を目指した枠組みの提案としては、非常に意味のある課題であったと考えるが、どのような方にシステムを使ってもらおうのか、その時に、このシステムが得意なこと、不得意なことを整理した上で、得意な点を活かす方法について検討を深めていただけると、より良い研究成果の活用につながるのではないかと考えている。

## (1) 政策目標の達成状況等

(総論)

当時の社会において SNS 等の新しい情報ツールの利用価値を見せたことは評価できるが、当初予定していた日本語による情報集約プラットフォームの商用普及や国際標準化については成功には至っていない。また、防災情報サービスを自治体に認識してもらおうという効果はあったが、サービスが停止した令和 4 年以降は大きな発展はみられていない。

(被評価者へのコメント)

- LLM の急速な発展もあって商用化に結びつかなかった点はやむを得ない部分はある。
- 当時の情報技術において、社会において SNS 等の新しい情報ツールの利用の価値を見せたことは評価できる。
- 自治体向けの防災サービスについては、経済的なことを考えると、無償の形でないと難しい点があったと思われる。一方で、サービス停止後の知見、データなどの活用については、何か展開があるのか、報告があるとよかったと考える。

- 当初目指した日本語による情報集約プラットフォームの商用普及という意味では成功しなかった。また、国際標準についても成功していない。防災情報サービスを自治体に認識してもらうという効果はあったであろうが、コスト・人的資源的に自治体などには受け入れられなかった。
- 令和4年度までは、社会的な効果を期待されていて活用されているが、生成AIの急速な発展という社会的な状況の変化などもあり、大きな発展はしていない。

## (2) 成果から生み出された科学的・技術的な効果

### (総論)

EI(災害対応基本共有情報)の検討や RASECC-GM(避難所状況応急評価システム)に活用されたこと、SNS 利用による、個人情報の管理や誤った情報の流布に対する課題感を明確にできたことは価値があると考えますが、SNS の情報収集コストと商用サービスの価格のバランスに対する検討や、獲得した運用レベルの知見の整理・再利用がなされるとよかったです。

### (被評価者へのコメント)

- 政府の防災データプラットフォームにおける EI(災害対応基本共有情報)の検討や RASECC-GM(避難所状況応急評価システム)に活用された。
- SNS を利用する際に、個人情報に関する管理や誤った情報の流布に対する課題感などを明確にできたことは価値があると思われる。
- SNS の情報収集も継続的に行わないと、本来、大災害がおきたときに過去に似た事例の情報提供、対策も含めて、対応が難しい。そのあたりの SNS 情報収集コストと企業におけるサービスの価格がかなり釣り合わない状況にあったようにも見受けられる。これらの基盤となる情報収集に際しては、NICT などの国のバックアップを検討するとよかったですと思われる。
- NICT のエンジンを利用しており、科学的・技術的な新規性は少ない。SNS 情報の不安定性など、現実的な運用レベルでの知見は集まっており、その整理と再利用ができればよかったです。
- 防災科研などの情報の活用を検討する組織などに、当時の技術での情報提供を行う枠組みを提供することにより、具体的な検討を開始することが可能となった。

## (3) 副次的な波及効果

## (総論)

防災 DX の推進、波及効果は認められ、防災関係の公的機関における研究開発の技術的なシーズとなった。一方で、自然言語処理における RAG (検索拡張生成) などの考え方に対して、本プロジェクトも何らかの貢献ができる可能性はあったと思われる。

### (被評価者へのコメント)

- 本事業で当時議論したユースケース、災害発生直後のデータ利活用に関する SOP (Standard Operating Procedures の略。標準作業手順書) は上記協議会のインプットとなっており、我が国の防災 DX 推進にも波及効果があった。
- 防災と ICT 利活用と観点からは、我が国において重要であることが示せたと思われる。
- 新たな技術 (例えば、LLM 等) に向けても、自然言語処理における RAG などの考え方に対して、本プロジェクトも何らかの貢献ができる可能性はあったと思われる。
- 現在行われている防災関係の公的機関での研究開発の技術的なシーズとなった。
- 異分野連携も含めて、防災 DX に関する波及効果は認められる。

## (4) アウトカム目標の達成に向けた取組計画の達成状況等

### (総論)

人材の育成とその展開に寄与した点、社会実装に向けて努力した点は評価できる。ただし、どのような利用者を想定し、アプローチするかについては検討の余地があった。なお、NICT が無償サービスを継続していることを考えると、まったく異なる方向性のサービスを検討する必要もあったと思われる。

### (被評価者へのコメント)

- 商用化できなかった理由に関してそれなりの分析はしている。
- サービス停止は残念であるが、企業努力としても、いつ起きるかわからない防災への対策の価値をアピールするのはやや難しく、本来、行政府が主体になったほうがよかったと思われる。NICTが無償サービスを継続していることを考えると、まったく異なる方向性のサービスを考える必要があったかもしれない。

- 人材の育成とその展開に寄与したことは重要である。
- 目標達成にむけて努力はされたが、生成 AI の発展の時期と重なり、状況的に困難であった。
- 社会実装に取り組んだところは評価できるが、生成 AI の急速な発展に伴うビジネス環境の変化に対して、対応が難しかったのではないかと考えている。一方、質疑にもあったが、どのような利用者を想定し、その想定した利用者にもどのようにアプローチするのかについては、もう少し検討をしても良かったのではないかと考える。

## (5) 政策へのフィードバック

### (総論)

防災情報サービスにおいて、自治体向けの商用サービスは困難であり、国が支援する無償サービスとするのが適切であり、データの継続的利活用に向けて、こちらも政府の支援は必要であったと考える。プロジェクトのテーマとしては SIP などの防災プロジェクトに影響を与えたと思われるため、妥当だったと考える。なお、目標未達となった項目については追加で分析が行われている。

### (被評価者へのコメント)

- 目標を達成できなかった項目について、なぜできなかったのかその理由を分析して報告することが重要。
- 防災に対する ICT 利活用という観点で、その後の SIP などの防災プロジェクトに影響を与えたと思われる。
- ICT 技術のトレンドは大きく変化することがあるが、データ自体が変わることはない(つまり、防災に関するデータはセンサーなども含めて、異なる技術が使われても、災害の大きさ、雨量、地震の大きさ、関連する地域と実行等)と思われるため、データの継続的利活用に向けて政府の支援は必要と思われる。
- 防災情報サービスに関しては、自治体向けの商用サービスは困難であり、国が支援する無償サービスとするのが適切であろう。
- 防災のための情報収集という枠組みの有用性についての議論は評価できる。